



英語だけでなく算数もコンピューターも体操も芸術も。盛りだくさんのインド式英才教育が2歳から受けられる「リトルエンジェルス・インターナショナル幼稚園」／東京・三鷹市、次ページも

インドの教育 ブレーク寸前

学力回復の救世主？

ITを中心に、驚異的な経済発展を遂げるインド。
その優秀な人材は、世界中で引く手あまただ。
もはや「カレーとヨーガの国」ではなく、「人材の国」。
高レベルの教育に、日本でも注目が集まり始めている。

に賭けた子供から歓声が起きる。
日本では小学校5年生で習う
「偶数と奇数」を、4歳にして、
しかも英語で理解しているのは、
東京都三鷹市にある「リトルエン
ジェルス・インターナショナル幼
稚園」の子供たち。

10〜15分のプログラム

「インドの子供たちがやる遊びで
す。掛け算も遊びながら理解し、
自然に学んでいくんです」

満足げに語るのは、ラニ・サン
ク園長(48)だ。インドの大学でM
BA(経営学修士号)を取り、若
くして大手石油精製会社の経理担
当重役になったが、1991年、
エンジニアの夫の転勤に伴って来
日。2人の息子を保育園、公立小
に通わせたことで、

「同じことを教えるにも、インド
と日本ではこんなに違うのか」

と、教育への興味がわいた。や
がて世界各国の教材を取り寄せ、
海外旅行に行くと必ず現地の学校
を訪ねるなど研究を重ね、独自の
カリキュラムを開発。2002年
に英語教室、その2年後には念願
の幼稚園開園にこぎつけた。

園児は現在、2〜4歳児で合わ
せて25人。大半が日本人だ。園内
での会話はすべて英語。教師10人
は、インド人のほか、インドネシ
ア人とオランダ人のハーフ、日本
人など全員がアジア出身。英語を
純粋な母国語とする人はいない。
「セカンドランゲージとして英語
を学んだ人のほうが、教えるのは

「odd or even?」
右手に幾つかのビー玉を隠した
先生が、4歳児11人に問いかける。
「イーブン(偶数)！」
「オッド(奇数)！」
あちこちから上がる元気な声。
先生がビー玉をテーブルの上によ
らすと、子供たちは体を乗り出し、
数え始める。
「one, two……」
2個ずつ並べ、あ、最後に1個
余った。9個。即座に「オッド」

念だからだ。

「three」の発音が「トゥリ」になるなど、やはりインド独特の発音が混じるが、4歳の娘を通わせる島津敏子さん(34)は気にならないという。

「私がthinkを発音すると、娘からは『違う、ティンクだよ』と直されてしまいます。アメリカやイギリスの英語だけが正しいわけじゃない。コミュニケーションできることが大切だと思います」

月曜から金曜までカリキュラムはびつちり。英語、算数、コンピュータ、理科、芸術、図書、体操音楽……。まるで小学校のようだが、子供の集中力が続く10〜15分単位で、遊びながら学べるようプログラムされている。

堂々主張「人前力」養う

「娘は最初、普通の幼稚園に通わせていたんですが、ここでしか得られないものがあると思い、4歳で転園しました」

と言うのは大平淳子さん(38)。

留学経験があり、外資系企業で働いていたが、英語の習得は「年をとればとるほど大変」と身をもって実感。子供には英語を自然に学べる環境を与えたかった。入れてみて、英語はもとよりカリキュラムの充実度が大満足。特に4歳から足し算や掛け算を教えるインド式の算数や、インド製ソフトを使ったコンピュータの授業など、レベルの高さに驚いたという。

2歳の算数のクラスをのぞいてみた。すでに20までは完璧に数えられる。数字を書く練習が始まってまもなく、1人の園児が、

「Can I go toilet?」

と先生に断ってトイレへ。子供たちは、家では日本語、幼稚園では英語を自然に使い分けている。先生の英語はほぼ100%理解しているようだ。

4歳のクラスでは、普段は5分としてじっとしていないという男の子が、一心にパソコンに向かってた。同じ韻を踏む単語を見つけてるゲームや、糸やろうそく、針といった三つの絵を見て一緒に使う二つを見つけるゲームなどに夢中で取り組む。

「科目を教えているわけではありません。主眼は脳を刺激すること。そうすれば子供は自ら学び、どんな伸びていくんです」(ラニ園長)

ラニ園長が特に子供たちに身に

つけさせたいと考えているのが

「人前力」。インド人が国際的に通用するのは、「国際会議で有能な議長とは、インド人を黙らせ、日本人をしゃべらせる人」という

ジョークがあるほど、堂々と人前で自分を主張できる「人前力」のある点が大嫌い。その力を幼いときから養おうという狙いだ。

そのために週1回、「show and tell」という授業がある。「自分の好きなおもちゃ」など毎回テーマに沿って各自、家から何かを持参。なぜ好きか、どうやって遊んでいるかなどを皆の前で英語で発表する。

学費は週5日コースで月5万5000円。教材費や入学金を合わせて年額80万円前後。親たちは、「普通の幼稚園よりは、もちろん

インドの教育レベルは日本ではまだあまり知られていないが、インド人にとっては大変な誇りだ

高い。でも、インターナショナルスクール(インター)の幼稚園に比べれば、ずっと安いですよ。いま投資するほうが、将来的には安上がりだと思います」

小学生で二桁の九九

国内のインターや欧米の学校の代わりに、中学・高校生の子供をインドの寄宿学校に通わせる日本人もいる。インドには旧宗主国の影響でイギリス式の寄宿学校がたくさんある。中でも日本人を含めた外国人に人気があるのは、ヒンディー語が入学に必須ではないウツドストックスクールだ。

首都ニューデリーから車で約8時間、ヒマラヤ山脈を望む標高2000メートルの高地にある同校は、約150年の歴史をもつ。

大野灯さん(16)は、小学5〜6年をタイのインターで過ごした後、同校に進学した。タイにいたのは、母の春見さん(45)が日本語教師として国際基督教大学(ICU)教員からタイの大学へ派遣されていたからだ。中学進学に際し、帰国するか海外に残るか迷った。

「最終的に、2年間苦勞して英語が使えるようになったのだから、もう少し英語で勉強を続けよう」と決めた(灯さん)

ウツドストック校を選んだのは春見さんだ。ICUの日本語コースの教え子やICU教会の関係者の子弟に卒業生が何人かいた。

「多様な文化を自然に受け入れる適応力、寛容性があり、とてもい

い感じの子ばかりでした。娘を海外の学校に通わせるなら、アメリカ系の学校ではなくウツドストック校にしたいと思っていました」

春見さんは実際に灯さんを通わせてみて、満足している。

「私が希望した通り、灯はネパールなどアジアに興味を持ってきていますし、大半の生徒が楽器を習うなど音楽や芸術の教育が充実しているのも気に入っています」

学費は、寮費や食費、灯さんのファゴットのレッスン代もすべて含めて200万円弱。欧米の寄宿学校に比べれば割安だ。同校の外国人は、05年9月時点で全校生徒472人のうち246人。日本人は16人で、その多くは親が口コミで評判を聞きつけたのがきっかけで通い始めたようだ。

IT技術者のインド人が急増する東京では2年前、江東区に「インディア・インターナショナル・スクール」が開校した。東京には欧米系のインターも数多いが、小学生で習う二桁の九九をはじめインドで高度な教育を受けた親には物足りず、「母国と同じ教育を」というニーズに応えるためにできた。現在、幼稚園から中学まで約140人の生徒が学ぶ。

同校の設立に貢献したジャグモハン・チャンドラニ氏は言う。

「インドの教育の充実度を知れば、将来、この学校にも確実に日本人生徒が入ってくるでしょうね」

ライター 石臥薫子

編集部 大岩ゆり

